

従軍記

沖 悦 子 さん

これは、御家族の自分史の一節で、第7戦隊浜松飛行戦隊で将兵等を輸送する任務に就き、最後の搭乗について書いた場面です。

忘れることの出来ない最後の飛行は昭和20年4月24日。(運送屋廃業日と記憶する。)この日、4月というに5月中ごろの霞^{かすみ}の多い好天気。昨日インコウ⁽¹⁾より開城⁽²⁾に着き、十分な睡眠も取ったし体調共に良好だし、今日は嘉手納^{かてな}往復だけで離陸時間も9時の予定と言う事もあり、久しぶりにのんびりと朝食にありつく。いつもの事ながら、

我々4名の仲間(戦友)は機長たちとも他の搭乗員とも離れた場所に陣取りのんきに馬鹿な話ばかり言い合っている。煙草の支給が多いのかいつも誰かの煙草が



くゆっている有様だ。今日も恩賜⁽³⁾の煙草を頂くが、まだ生きている。出発時刻が近づくが、将兵の姿が見えなく、糧秣^{りょうまつ}と弾薬の準備のようだ。兵士が各機に5、6名乗り込み10分遅れて離陸する。上空に雲一つない飛行日和だ。脇から機長が「こんな日には注意して飛べよ。」と忠告してくれる。9機1波の編隊飛行で我が機は6番に位置する。

敵機の姿も見えず、沖縄の島もかすかに見え始めた時、伝声管⁽⁴⁾に「南方より敵編隊北上中、嘉手納^{かてな}着陸を北飛行場に変更せよ。」の指令があり、我々は即座に着陸姿勢に入るが、いまだ私も機長もこの飛行場は初めてのこと。着陸可能なのか？我が機はしばらく上空で旋回待機が続く。滑走路は短く、端は海だ。「制動を掛けねば駄目だぞ。」と機長の声を耳にしながら、早めに2速に落とす。上出来の着陸だが、誘導する兵士の姿は無く、慌ただしい場内の動きが見える。

9番機も着陸する。走るトラックの上から2,3名の兵士が声を限りに何やら叫んで通り過ぎるが聞き取れない。2,3分後「弾薬を降ろし,速やかに空中分散せよ,敵機接近中。」と伝令が伝えて,また走る。バラバラと多くの兵が駆け寄り,弾薬を運びだし,糧秣りょうまつは機上より放り出すが,我々の全機には帰り着く燃料がない。隊長機に連絡に出ていた機長が息せき切って帰り,「燃料の続く限り陸地に飛ぶ。」と地上兵に合図する。全機始動に掛かり,空ぶかしすることも無く,我先にと飛び立つ。200mも昇



った頃,機長は「高度はここまでに針路北に取れ。」と言う。1番近い陸地は中国大陸しかない。私は何となく敵に遭遇する予感がわいてきて,銃座に着くことを進言した。機長も私の意見に同意し,「速やかに配置に着け。」と命じ,「操縦代わるぞ。」と直に桿(5)かんを持ってくれる。離陸後,5,6分飛行したころ,機長が「来たぞ」と大声を出す。前上方30度

⁽⁶⁾にP38の15,6機の群れを見る。我々より先に離陸した5機が7~800m前を高度も区々にまともに飛び込んでいく。頭上の敵機に気がついていないのか。危ないと思う間もなくその1機が垂直になり,落ちて行く。続けざまにまた1機が真っ赤な炎を上げる。雀すずめは上に下に飛び交う。炎はアッと言う間に広がり,黒煙を引いて落ちて行く。機長は「駄目だ。」と言うが早いか180度針路を変えて高度を100mまで降ろす。不運にも雲一つない。突然,曳光弾(7)えいこうだんの帯が顔面を1条2条と掠め飛び, P38が側方を急上昇する。機銃音がバリバリと聞こえるほど近くだ。我が機首も尾座(8)の機銃も負けじと一斉に火を噴く。我が機はさらに30mまで下げる限界高度だ。これ以上降ろすと水を被る。

プチプチと張り詰めた紙を針で突き刺すような異様な音を耳にする。大きく機を振る

動作をしているようだが、重いので動きが緩慢だ。また尾座の機銃がババババンと休みなく唸る。敵機は我が機を笑うがごとくに悠然と我が機の真横を飛び過ぎる。機首の機銃がそれを追うかのようにバリバリと鳴るがこれも無駄だ。よく我々の弱点を知っての攻撃だ。5、6分の戦いか30分の戦いか分からない。前、上下、左右と血まなこに見張る目に島影を洋上に見る事が出来た。敵機の姿もなくなり、機長が「済州島だが行き着くかな。」と口を開いてくれた。燃料は7速の全速飛行のため、指針0を示しており、2、3分持てば良いところだ。高度を最後の力で昇る。200m、250mで3速に落とす。半滑空⁽¹⁰⁾で飛行場が見えてくるが、滑走路の真ん中で1機のエンジンから黒煙を上げている。滑走路がふさがれていては、とても着陸は無理だ。「北まで飛ぶか？」と独り言を言う機長はまたまた上昇を始めるが50mも上がらず、高度は落ち始める。「全員安全帯を強く締めろ。」と重い口調で皆に指示する。小高い丘の向こうに飛行場が見える。完全滑空で、それも滑走路と進入角は90度も違い、進入角を合わすため大きく旋回する。このままの飛行だと森に突っ込むと私は無造作に足を踏ん張った。最後の1滴の燃料か？エンジンはパンパパンの音を残して左が停止した。私は見開いていた目を一瞬閉じた。次の瞬間、機の下部をバリバリと松の枝が叩く。ババンと右エンジンも停止し、1、2度翼を小枝が撫ぜるが何とか障がいの丘は乗り越えたようだ。一度車輪は接地したが砂地に潜り込み尾部が浮いて来る。瞬時に私は裏返ると判断して両手を前に突き出した。何のためか？後で考えるとお笑い草だ。が次の瞬間、バリバリでもなくベキベキでもない異様な音で機は大きく棒立ちで止まってくれた。2人の乗員は操縦室に4本の足を振り上げて安全帯で宙吊りの姿でいる。そんな事には目もくれず機長は「やっちゃった。」と頭を抱えて呟き、私の顔を見る。私はよくぞここまで飛んで来ることが出来たと機長の的確な判断と技量に敬服する。

その後、幾度と危険な状況に追い込まれながら、昭和20年8月29日8時過ぎ、無事日本へ帰還されました。

-
- 1 インコウ...營口。中華人民共和國遼寧省にある都市。
 - 2 開城...朝鮮民主主義人民共和国の南部にある都市。
 - 3 恩賜...君主から臣下などに対して、これまでの忠節や功勞を感謝するために与える物品。
 - 4 伝声管...離れた場所と直接通話ができるように設けた長い管。船舶・航空機などで用いた。
 - 5 桿...さお状の棒。ここでは操縦桿のこと。
 - 6 P 3 8 ...ロッキード社が開発し、1939 年にアメリカ陸軍に正式採用された双胴（正確には三胴）双発、単座の高速戦闘機。
 - 7 曳光弾...射撃後、飛んで行く間に発光することで軌跡がわかるようになっている弾丸のこと。
 - 8 機首...航空機の胴体の前頭部。
 - 9 尾座...軍用機の尾部に設置された銃座。
 - 10 滑空...航空機のエンジン停止状態や遅い回転状態での飛行。